

退職記念講演（二〇二四年三月十一日）

古典・文学・発想

——「ホモ・デピクトル」（表現する人）のために——

風間 誠史

はじめに

本当は、私が話をしたいというより、私は他の先生方の話を聞きたいのです。この「退職記念講演」の企画で色々な分野の先生の話を聞くのは大変楽しいものでした。近年コロナ禍で、この企画も中断してしまい、今回も残念ながら私だけしか手を挙げなかったとのことですが、ぜひ今後この企画、と言うよりもせっかく本学に集まった多様な分野の専門家が交流する場を、大切にしてほしいということを最初に申し上げたいと思います。

さてしかし、この「退職記念」の企画で、どうも日本語日本文学科の教員の話というのを聞いた記憶がありま

せん。まあ、面倒くさいというのが主な理由なのでしょうが、同時に日本文学研究という分野がいわゆる学会・アカデミズムを含めて長い歴史を持ち、安定した研究分野であるために、他分野への感心が希薄だということがあると思います。学会・アカデミズムにおける評価や立場が確立しているため、その外にいる人たちに対して、自分の研究について今さら説明する必要を感じないわけですね。

私も、学部長とか副学長・学長などといういわゆる役職につかなければ、そうした感覚を持ち続けていたかもしれません。ただ、幸か不幸かそうした立場になり、他分野の先生方と接する機会が増え、また自分の学科以外

の学生の活動にも目を向けるようになったことで、多少とも自分の研究分野や研究・教育のあり方について相対的に見る視点を得たように思います。

そういうわけで、私は日本文学、特に近世文学といういわゆる「古典文学」を専門分野としていますので、そうした分野の研究（そして授業）というのはどんなものなのか、どんなコンセプトやアプローチがそこにあるのか、といった話をさせていただきたいと思います。それは、自分がどういうスタンスで研究や授業をしているのか、ふだん無意識に行っていることをあらためて言語化してみることになります。どんな話になるのか、実のところ私にもよくわからない状態で、とりあえず「やります」と手を挙げたのですが：

一、「古典」について

まず「古典」の話からはじめましょう。「古典」とは何か？ という問いに、私は「読み継がれてきたもの」と答えることにしています。「古い」ものが古典なわけではなく、一定の時間を経ても繰り返し読まれているものが「古典」になります。誰も読まなくなればそれ

は「古典」ではなくて「古物」となり、博物館のガラスケースに収められるか、もしくはゴミとして棄てられるでしょう。そして、ここにこの研究分野の実際的な存在意義があります。「読み継がれてきたもの」を、今の時点の私が「読む」ことでさらに「読み継ぐ」。そこに「古典」が成立するわけで、私が読まなければ、そして一定の時間のなかで誰も読まなければ、「古典」は失われます。「古典」が「古典」であるために、今「読む」のです。そしてそれが「読む」価値がある（つまりは読んで面白いという）ことを示すことで「古典」をいわば継続していく。決して「古典」の価値や意義を決めるわけではなく、あくまでも先へつないでいく。これが「古典文学研究」の基本的な意味だと思います。

ちなみに「古典を読むことに何の意味があるのか？」という問いに対しては、「古典を読まない人生に何の意味があるのか？」というのが私の答えです。人にとって最大の幸福は、「学ぶ」ことによって自分が変化し成長して行くことだと思いますが、「学ぶ」ことのスタート地点は先人の成したことと考えたこと以外にはないので、つまり「古典」を読むしかありません。「古典」を読まない、特に近年のようにテクノロジの発達が著し

く、テクノロジーと自己の能力を混同する傾向がある時代だと、あたかも自分が先人よりも進歩し進化した存在であると錯覚する傾向があるようですが、「古典」を読めば、知的にも感情面でも、人間・人類が少なくとも数千年単位では一ミリも進歩・進化していないことは一目瞭然です。私たちは先人の発見や思考を踏まえて地道に進むしかないので。

二、「文学」について

私の言う「古典」は必ずしも「文学」には限定されません。しかし、少なくとも言葉で表現されたものは、広義に捉えれば全て「文学」と言えないこともない。特に、先に述べた「読み継がれる」ということには「文学」の本質的な部分が含まれています。「読み継がれる」ということは、様々な人によって、様々な時代環境のなかで「読まれる」わけで、それはそのテキストが一義的な受容にとどまらない、多様な読解と解釈を通して「生きて」いることを意味します。いわゆる詩や物語といった「文学」は、そうした読解と解釈の幅が極めて広いので典型的な「文学」ということになります。しかし、そうした

ジャンルを超えて、読解・解釈の多様性を持つテキストは全て「文学」だと言ってよいと思うのです。逆に言えば、一定の情報をほぼ一義的に伝える言語表現は「文学」ではない、あるいは「文学」からは遠い存在と言えるでしょう。

ちなみに、高等学校の学習指導要領が改定され「国語」が「論理国語」と「文学国語」に分かれました。この「論理国語」というのは、マニュアルとか実用的な文章のことだとされています。一見、そういう文章を読んだり書いたりする能力の育成は必要なのにも思えます。しかし、こうした「論理」と「文学」の二分化というのは、あまりにも時代後れです。端的に言えば、これは理性と感情、脳と身体を二元的に捉えるいわゆるデカルト主義で、それは二十世紀以後の科学・哲学が批判し否定し克服してきたものです。人間は、そして人間の言葉による表現は、論理や理性に単純に還元されるものではなく、そこには言葉を発する身体があり、気分・情動・感情がむしろ先行している。これが二十世紀以後飛躍的に進展した脳科学や生命科学あるいは言語哲学の語るところです。もっとも近年のAI万能主義的な動向はまさにデカルト主義への回帰であり、人間の知的後退を示している

のかもしれませんが。日本文学の研究者としては、「論理国語」のなかに「文学」つまり身体性や気分・情動があることを示し、「文学国語」のなかに、人間本来の「論理」や思考があることを示し続けていかなければならないと思います。

さらに付け加えると、読解と解釈の連鎖として生き続ける「文学」には、先ほど述べた身体性や情動と密接に関わるものとして、快楽、あるいは娯楽性が本質的なものとして存在します。人間は基本的に快楽を追究する存在であり、ホモ・ルーデンスと言われるように、遊びや娯楽を重要な存在要件としています。これを排除した「論理国語」なるものは、そもそも言葉の、あるいは日本語の搾り粕にすぎないことを指摘しておきます。

三、「研究」について

さて、以上のようなスタンスで私は「古典」そして「文学」と向き合ってきました。で、具体的な「研究」ということになるのですが、どの研究分野でもそうでしょうが、地道なルーティンがまずあります。たとえば様々な「古典」「文学」のテキストに関する基本的な情報収集や

データベース作りです。

ちなみに本学の図書館にはかなりの量の日本文学の古典籍が収蔵されていますが、私が着任した当時、それは図書館にただ放り込まれていて、目録すらありませんでした。着任して十年くらいのころに、それを整理し、一点一点書籍としての特徴などいわゆる書誌的事項を確認して記述した目録、データベースを作成しました。『相模女子大学蔵書でたどる 古典文学の世界』という冊子です（正確にはその中の「附 相模女子大学附属図書館古典籍目録稿」）。これが作られたことで本学蔵書は国文学研究資料館という国の機関のデータベースと連結し、国内外の研究者に共有されるようになりました。私の本学に対する最大の貢献は間違いなくこの一冊にあります。でも、まあそれは先述の通りルーティンワークであり、別に私でなければできないといったものではないし、私の「研究業績」にはカウントされないのですが、ちよつと自慢話としてお話しさせていただきました。

あるいは、ある作者のテキストを研究するために、まずはその作者の書いたテキストを可能な限り収集し、リスト化し、可読化するといった作業。これもデータベース作成です。つまり文学研究というのは、多分どんな研

究も同様でしょうが、まずはデータサイエンスなわけですね。日本の古典文学作品で最も早くから本格的な研究が行われたのはおそらく『万葉集』ですが、『校本万葉集』という現存すべての写本の異同を記したデータベースが一九二四年に、そして『万葉集』のすべての単語（「は」とか「が」といった助詞まで）がどの歌のどこで用いられているかを示す『万葉集総索引』が一九二九年に刊行されています。研究者が『万葉集』の歌を読み、解釈する際には、最低限『校本』によってその歌の形を確かめ、『総索引』によって各語の『万葉集』における用いられ方（それが「意味」です）を確認することから始めます。そこから、自分の読解や解釈を展開するわけです。

なお、文学研究において自分の研究対象、研究分野をどこに設定するかというのは、基本的に各研究者の好み、興味にゆだねられます。どんな学問分野でもつきつめれば同じではないかと思いますが、「文学」は先述の通り、そもそも娯楽性と不可分なもので、研究とそうした娯楽性・趣味性の区別はつけられないと思います。文学研究者はオタクであり、最近の言葉で言えば「推し活」をしているにすぎない、というのは事実です。ただし、それは先ほど述べたデータベース作りに典型的

なように、他の研究者（あるいは推し活者）と情報を共有し、それによってその「推し」の読解の可能性を開いていくものです。

「オタク」や「推し活」は、ともすれば自分の読解や解釈を絶対化し、他者との議論を忌避する傾向があります。「それはあなたの感想ですよ」と言って議論を閉ざすやり方に典型的ですが、私の解釈はこれだから、他の解釈は聞きたくない、聞く必要がないというのは、「文学」の可能性を閉ざし、もっと言えば「文学」を殺すものです。文学研究者は自分の読解・解釈を、他者の批判にさらすことで「文学」の可能性を拡げていきたいと考えています。まあ、他人から批判されないように、確実な資料をもとに穏当な（誰もが納得しやすい）解釈を示す「学者さん」も少なからずいますけれど、これもどんな分野でもそうではないでしょうか。でも本当の意味で学問・研究の世界を担っているのは、「学者さん」ではなく、批判を恐れない研究者です。

四、「授業」について

私はそんな研究者を目指していますが、一方大学教員

としては何をやっているのか。私は本学の学生たちを研究者として育成しようとは考えていません。したがって、

文学研究のルーティンとか技術・技法のようなことは、簡単に触れる程度で深入りはしません。それよりも、学生たちには「古典」としての「文学」を読み継ぎ、語り継ぐいわば裾野になつてほしいと考えていて（虫のいい話かもしれませんが、それが古典文学研究を支えてくれると思つています）、ですからまず「古典文学」の面白さ、魅力を感じてもらふこと、そしてその魅力の本質が先ほど来述べてきた読解・解釈の多義性・可能性にあることを示すこと、これに注力しています。簡単に言えば、テキストの解説をするのではなく、学生ひとりひとりがテキストを自分なりに読むように促すということです。具体的手順は色々ありますが、典型的なものとしては、読解のうえで分かれ目となるポイントを提示して、それぞれの意見を求めることから、最終的には自分で問題点・疑問点を発見し、提示できるように場面設定をします。三年生のゼミはそうした疑問点を出し合い、他人の提起した問題点について自分の考えを述べる、といったトレーニングの場です。そして四年生の卒業研究では、テーマ設定（本当に自分が述べたいことは何か）が最も

重要で、そしてそのテーマを追究していくなかで、さらにテーマの意味を深めていけるかを問いかけます。

五、「発想講座」について

以上は学科のいわゆる専門教育の授業ですが、一方では全学共通科目の「さがみ発想講座」（オムニバスで三回分）を担当してきました。これは様々な学科の一年生を中心とした授業で、日文の学生はほとんどいません。ここで、「古典文学」の領域からどんな授業ができるのか、というのは、私にとって大変チャレンジングなことでした。授業のテーマは「発想」なわけですが、私は先ほど来何度も述べてきたように、「古典文学」の要件は読解・解釈の連鎖だと考えており、自分なりの読解・解釈を提示するというのは、まさに「発想」にほかならないと思つてこの授業にチャレンジしたわけです。限られた時間で、そして「古典文学」に特に興味も関心もない学生、という前提で何ができるのか。

そこで思いついたのが「連歌」という古典文学です。「連歌」は鎌倉時代から江戸時代にかけて、日本人の文学的な営みの最も中心的な存在でした。複数の人が集

まっで行う言葉遊びというか歌（短歌）のゲームになります。そこでは他人の歌を自分なりに読解・解釈し、それを自分のなかに取り込んで、自分の歌にしていく、というまさに「文学」の受容と創造が同時に展開するのです。具体例として、芭蕉が門人二人と作った作品を紹介します。

市中はものの匂いや夏の月

（街中・繁華街の夏の夜の賑わい）

あつしあつしと門々の声

（「暑い暑い」と皆が言っている）

二番草取りも果たさず穂に出て

（農村の「暑い暑いと言いながらの」草取り）

灰うちたたくうるめ一枚

（粗末で簡便な食事）

この筋は銀も見知らず不自由さよ

（農村で銀貨を出した旅人、使えないで文句）

ただとひやうしに長き脇差

（旅人の様子、ヤクザ者のよう）

草むらに蛙こわがる夕まぐれ

（ヤクザ者が、草むらから飛び出した蛙に驚く）

露の芽とりに行灯ゆりけす

（山菜取りの少女が蛙に驚き行灯が消える）

ポイントは、前の句とは当然つながるのですが、ひとつ前の句（打越と言います）とは別の場面でなければならぬ、ということです。「街中の夏の夜」から「暑い暑い」を挟んで「農村の草とり（昼間です）」へ。「草むらから飛び出した蛙」に驚くのが「長い脇差のヤクザ者」だったのが「山菜取りの少女」へ。どんどん変わっていきます。「連想」のゲームであると同時に、「連想しない」ゲームでもあるという、非常に高度で、「発想力」を鍛えるにはもってこいの「古典文学」なのです。

授業では、こうした連歌のルールを説明しながら、一回目の授業で全員に最初の句（発句と言いますが、ようにするに俳句です）を作ってもらい、二回目以後、その中から私が選んだ句をスタートにして、三～五人のグループに分かれ、それにつながる二句目を出し合い、話し合って決めていき、それに続く三句目以降も同じようにやっていきます。三回目までで私の担当は終了なので、できたところまでで終了になりますが、たとえば今年度の例だと、こんなものが出来上がっています。

A

秋刀魚焼き すだちにおろし 囲む夜
お腹いっぱい 皆満たされる

夕焼けに 照らされ歩く 帰り道

秋刀魚焼き すだちにおろし 囲む夜

家族で食べる ほかほかごはん

湯気香り 包丁の音 目が覚めて

時計の針に せかされる朝

炎天下 かばんゆらして 流す汗

今日のごほうび アイスクリーム

試験後の 足取り軽い 帰り道

秋刀魚焼き すだちにおろし 囲む夜

感じる視線 狙う猫の手

舞う蝶の 求むは花の 甘い蜜

無限躑躅の バイキングやあ!

雨あがり 秘密のおやつ 帰り道

駄菓子屋の前 指切り交わす

秋刀魚焼き すだちにおろし 囲む夜

秋がはじまる 肌寒い風

紅葉の 葉がゆつたりと 散ってゆく

鯉泳ぐ池 波紋広がる

暗闇の 水面に映る 空の花

こうした授業をかれこれ十年くらい続けていますが、最初は「連歌」のルールをある程度しっかり教えて、それに沿って作らせていました（その方が実はスムーズ）。それがやっているとうちに、だんだんと「連歌」のルールは最低限にして、とにかく「発想」してみることに力点を置くようになりました。

「とにかく「発想」してみる」とはどういうことかという、要はいかにグループで色々な句を出し合って、どれがいいとか、面白いとか、話はずむことがポイントだと考えました。俳句や短歌というのは、誰もが自分のちよつとした経験から作ることができるもので、それを共同で行うというのは、つまりは「雑談」みたいなものです。「発想講座」というと、通常は何かテーマを決めて課題解決的な共同作業を行う、アクティブラーニングとかPBL的なものが基本だと思いますが、「古典文学」の「発想講座」はとりあえず身の回りの出来事や自分のささやかな思い出などを友人と語り合い、それをちよつとした「作品」として表現してみる、ということになります。

ですから私が授業のなかで今最も大切にしているのは、先ほど言った「雑談」です。いかに学生たちが楽し

く「雑談」するか、というのが授業の最大の目標なのです。「雑談」ですから、テーマも課題もなく、ただただだと、とりとめもなく話すわけですが、でもそれがAIにはできない人間の「発想」の根底をなすのではないか、と思っています。そして「古典文学」はそうした「人間」の「発想」に極めて有用な、あるいは不可欠なものではないか、と。

六、余談もしくは本論

こうして、一応自分のこれまでの営みを振り返ってききましたが、振り返ることで見えてきたことがあります。先ほど「文学」の存在意義として人間が「ホモ・ルーデンス」(遊ぶ人)であるということ述べましたが、考えてみると「遊び」は必ずしも人間だけのものではないように思います。少なくとも動物は犬も猫も野生動物も、皆「遊ぶ」ように見えます。(これはこれで、非常に不思議なことだし、生物・動物・人間とは何かを考える重要なポイントのような気がします)。だとすると、考えるべきは人間の「遊び」が他の動物の「遊び」と異なる点はどこにあるのか、ということになります。そこ

で思いつくのは「ホモ・デピクトル」(表現する人)ということです。人間は「遊び」の延長というか発展として「表現」を生み出し、それが人を人たらしめている、という考え方です。これはイアン・ハッキングという科学史家のアイデアですが、そうした考え方に立てば、私の「雑談」とルーズな「連歌」作りの試みは、人間の、ヒトとしての最も基本的な営みをトレースしているということになり、人間の本質的なあり方を学ぶ上で意味のある取り組みだということになるのではないのでしょうか。

おわりに

というわけで、雑談的なとりとめのない話を聞いていただきありがとうございました。私は三十一年間本当に楽しく研究や授業(そしてその他の雑務)をやってきました。その到達点が、こうして考えてみると「雑談」という「遊び」だったわけです。これからも皆さんと雑談する機会が持てれば、と願っています。

【関連する拙稿】

発想と古典文学——「さがみ発想講座」の実践報告

（『相模国文』第四三号、二〇一六）

「私の心の風景」と連歌の授業について——文学教育は何に「挑戦」するのか

（『相模国文』第四六号、二〇一九）

イアン・ハッキング『表現と介入』を（文学的に読む）（『相模女子大学紀要』第八四号、二〇二一）

（本学非常勤講師・名誉教授）